

---

# バカと忍と召喚獣

ふりたー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと忍と召喚獣

### 【Nコード】

N5628Y

### 【作者名】

ふりたー

### 【あらすじ】

革新的な学力低下対策として『試験召喚システム』を初めて導入していた文月学園。そこで個性的なメンバーと転校生の主人公のお話

## プロローグ（前書き）

はじめまして「ふりたー」です。よろしくお願ひします  
処女作なので頑張っていきたいです  
タイトルは仮なんで変わるかもしれません

## プロローグ

### 文月学園

この学園には科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』なるものがある。

『試験召喚システム』とは、テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うことができるらしい。謂わば、使い魔のよくなものか？と俺は認識している。

学力低下が懸念される昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、『召喚獣』を用いたクラス単位の戦争

『試験召喚戦争』というものだ。

『試験召喚戦争』というのは…まあ詳しい説明は後でもいいだろう。

なぜ説明口調なのかって？

それは、俺はこの学校の転校生として2年生から通うための確認みたいなものだ。

とりあえず、楽しい学園生活を送ればいいかなーと気楽に構えてようと思う。

学園へと続く道の両脇には新入生を迎えるかのように桜が咲き誇っている。

柄にもなく見惚れながら歩いていたが、玄関前に辿り着いた時に思わず歩くのを止めてしまった。

なぜなら、その桜よりも印象強いものが目に飛びん込んできたからだ。

「お前が今日からこの学園へ通う服部正吾か？」

「ッ！はい、今日からこの学園へ通うことになってる服部正吾です」

返事に躓いてしまった俺は悪くないと思う。

目の前にいる男性は浅黒い肌した短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

その姿はまさに筋肉隆々という言葉がふさわしいだろう。多少、話には聞いていたが想像以上であった。

「そうか。俺の名前は西村宗一だ。何か分からないことがあったら俺に言うなり他の先生に言うなりしてくれ」

「よろしく願います。鉄じ　　西村先生」

まずい。思わず西村先生の渾名である「鉄人」と呼ぶところであった。

鉄人、鉄人と何回も聞かされていたら思わず言っちゃいそうになるよね！

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「なぜお前が俺の渾名を知っているのか・・・まあいい、学園長室に案内するから付いてこい」

ちなみに鉄人というのは西村先生の渾名で、その由来は先生の趣味であるトライアスロンが関係しているとのことだ。真冬でも半袖でいるあたりも理由の一つらしいが。

っと、いつまでも西村先生の事を説明していても意味はないと思い、西村先生の後を追ったのだった。

## ブローグ（後書き）

誤字脱字等ありましたらご指摘お願いします  
批判等はやさしくがいいです（チラッ

## キャラ紹介（前書き）

主人公の説明です

チラッと名前出ましたが詳しいことを



## キャラ紹介

### キャラ紹介

名前 服部正吾はっとりしんご

身長 175 cm 体重 50 kg 誕生日 7月7日

趣味 ゲーム関連 情報収集 悪戯

特技 両利き 隠密行動 家事全般 変装 武術

### その他

黒髪黒目 若干吊り目 髪はちょっと長い 女装が似合う 上の中  
性格は飄々としていて掴みどころがないといわれる。

身体能力は異常に高い。鉄人とは互角でやりあえる。頭も良いがた  
まにぬけている。

一人暮らし ムツツリーニとは転校前からの親友

### 召喚獣

ムツツリーニと似たような忍者衣装

武器は主力は鎖鎌。他には棒手裏剣やクナイなど様々なものを仕込  
んでる。

特殊能力は未定で

## キャラ紹介（後書き）

変更するかもしれませんが基本的にはこっぴつ感じですよ

## 第一問

side 正吾

俺は西村先生と共に学園長室へ行き挨拶を済ました。と言っても既に何回も会ったことあるしね！

口の悪さは相変わらずだったよ全く。けど元気なのはいいことだよ、うん。

バアさんとの会話なんて誰得だしね？割愛させてもらうよ。

その後は職員室で挨拶したよ。ちなみに俺はFクラスって事で今は担任の福原慎先生とともに廊下を歩いている。

途中、Aクラスを覗いている生徒がいたが何かを思い出したかのようになんて小走りで行った。

その生徒の行き先は・・・Fクラスじゃないか。それに情報で見たことのある顔だった。

彼が例の『観察処分者』なのかな？なんて考えていると

「服部君？どうかしましたか？」

と、福原先生に声を掛けられた。緊張してる？なんて思われているのかね。

とはいえ心配してくれるだけありがたいので、大丈夫です。と答えとく。

そんなこんなでFクラス近くに来たんだが、「ウジ虫野郎」とか「このクラスの全員が俺の兵隊だ」なんて聞こえてくる。

なんて会話だろうか？しかしなんだかオラ、ワクワクしてきたぞ！

side 明久

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で僕は少しだけ躊躇していた。

悪い考えが脳内を駆け巡ったが考えてても仕方ない。

これから共に過ごす仲間たちを信じよう。

そう思つて、僕は勢いよくドアを開けてから中の皆にできる限りの愛嬌たっぷりと言い放った。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

台無しだっ！

「聞こえないのか？ああ？」

なんて失礼な教師だろうか。そう思い僕は教壇に立っている男を見た。

そこに居たのは、僕の悪友、坂本雄二だった。決して教師ではない。

「……雄二、何やってんの？」

聞いたことのある声だなあ、なんて思ったけどまさか僕の悪友が教壇でいきなり罵声を浴びせてくるなんて普通は考えられない……いや、雄二ならあり得るかと思つていると

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

ニヤリと口の端を吊り上げる雄二。その言葉を聞いて思わず顔が綻ぶ。

つまり雄二を説得すれば、このクラスを動かせるって訳だ。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイト達を見下ろしている雄二。

そう、クラスメイトは皆床に座っている。

どうしてか？その理由は簡単。椅子が無いからだ。

「それにs」……………転校生が来るらしい「ホントかい！？ムツツリーニ！？」

突然会話に入り込んできた彼は土屋康太。小柄で口数が少なくおとなしい人物だ。運動神経はいいのだがあまり目立たない。やっぱり目立つとやりにくいのかな？いろいろと。

だが、今はそれどころじゃない！転校生の情報だろう！

「ムツツリーニ！転校生は女の子！？女の子だよね！？」

「うるさい黙れ明久。して、康太。その転校生の情報は？」

「……………なぜか情報がブロックされていた」

「その程度、いつもみたいに解除出来ないのか？」

「……………すまない。想像以上に強敵だった」

「…そうか、ありがとな」

そういい、雄二は考え事をし始めた。こういう時の雄二は何を考えている分らないので無視して空いてるスペースに座るのが得策だろう。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

その時、不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

そこには寝ぐせの付いた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンがいた。

「それと席に着いてもらえますか？HRを始めますので。あと、転校生の紹介をしますので」

一体、どんな人が来るのだろうか？

## 第一問（後書き）

主人公がFクラスとかはご都合主義ってやつでお願いします

## 第二問（前書き）

やっとと主要キャラとの絡みが多少



## 第二問

side正吾

福原先生に「しばらく待機しててください」と言われて待ってるんだけど緊張しちゃうぜ!

ファーストコンタクトは重要やん?ここで滑ったら楽しい学園生活は送れないと思うかも!

そんなことを考えていたら呼ばれたみたいなんで逝ってくる(キリッ字が違うって?気にしたら負けだぜ、うん。

「転校生の服部正吾くんです。どうぞ」

「どうも服部正吾です。趣味は盗さ…なんでもない。特技は盗ちよ…なんでもない。よろしくお願いします」

フツ…我ながら完璧な自己紹介だった。この挨拶ならアイツは気付くだろう。

「…ッ!」

視線をそちらに向けるとやはり気付いたようだ。さすが俺の親友…もとい相棒か。

席は自由らしいので俺はその顔なじみの元へと向かったのだった。

side ムツツリーニ

……担任の福原先生が転校生が来ると言っていた。この俺が情報を得れなかった転校生。凄く気になる。

そして、教室に入ってきた男を見た時に俺は目を疑った。

「どうも服部正吾です。趣味は盗さ……なんでもない。特技は盗ちよ……なんでもない。よろしくお願いします」

……ッ！この挨拶にあの顔、そして声。間違いなくアイツだろう。道理で情報が得られなかった訳だ。どうせ自己紹介に満足してるのだろう。ソイツは少し顔を綻ばせながらこちらにやってきた。

side 正吾

俺の自己紹介が終え、クラス内で自己紹介があるらしいがあらかじ

め調べてあるから確認程度でいいだろう。それよりも楽しみな事があるしな。俺は声を潜めつつ隣の親友に話しかけた。

「よう、康太。久しぶりだな。1年ぶりか」

「……………久しぶり正吾。大体そのぐらい」

変わってないな相変わらず。だが、それがいい（キリッ  
まあそれはいい。唐突だが本題だ。

「……………この学園に仕掛けられてるカメラや盗聴器はお前のか？」

「……………流石。バレないと思っていたが」

やはりか。康太以外でこの手の事の高スキルが奴は情報になかったからな。

「いや、俺も気を抜いていたら分からなかった。前より腕を上げるな」

「……………当然。日々の精進」

「さすが相棒。ところで放課後時間あるか？」

「……………あるが？」

確認も取れた事だし、乗ってくるだろうと確信し俺はニヤリとしながら言う。

「この学校の案内してくれない？それに…1人より2人の方が捗るだろう？」

「……………もちろん」

俺は満足し御礼を言う。ちなみにこの話の途中で康太は自己紹介を済ませている。

途中、「ダアアーリーーン!!」なんて大合唱が聞こえてきたが無視だ。

皆の紹介が終盤に差し掛かった頃、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん…」

「えっ？」

教室全体から驚いたような声上がる。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい!あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします…」

途中から声のトーンが下がる。そりゃ途中から来たわけだし、男ばかりだし仕方ないだろう。

「はいつ!質問です!」

「あ、は、はいつ。なんですか?」

「何でここにいますか?」

聞き様によつては失礼な質問だが仕方ないだろう。彼女は本来Aクラス上位の実力を有しているからだ。

「そ、その…」

「振り分け試験の最中に高熱を出してしまいました…」

その言葉を聴き、クラスの連中は『ああ、なるほど』と呟いていた。そんな彼女の言い分を聞いてか、クラス内でもちらほらと言いつの聲が聞こえてきた。

『そういえば、俺も熱一（の問題）が出たせいでFクラスに』  
『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』  
『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』  
『黙れ一人っ子』  
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』  
『今年一番の大ウソをありがとう』

想像以上に面白そうなクラスだなと実感したよ。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中で彼女は逃げるように吉井ダイリンと代表の隣の空いてる卓袱台に着こうとしていた。

吉井ダイリンは見ただけでもドキドキしているのが分かった。あれほど分かりやすい奴も珍しいだろう。

彼らが話し始めた姿を見てか、クラス内でもチラホラとそちらを意識している者が多数いた。

そこで俺は気付いてしまったんだよ…

俺、転校生なのに目立ってなくね？

いや、別に仕事柄もあるし性格もあまり目立ちたがりじゃないけどさ、多少は注目度があってもいいんじゃないかなあ（チラチラッ

「……………なんで俺は注目されないの？って顔をしてる」

さすが康太。よくわかってるじゃないか。

べ、別に悲しくなんかないんだからねっ！

第三問（前書き）

短いですがどうぞ

### 第三問

俺がさつきまで寂しい思いをしてたらな、教卓が机がゴミ屑になっただよ。

なにを言ってるかと思うが俺もよく分からない。

ただ、簡潔に言うとなんか先生が軽く叩いたら崩れ落ちたんだ。ちなみに、説明してなかったがFクラスだけあって設備がボロい。上のクラスに行けば行くほど設備が良くなるって仕様だ。

「え〜…替えを用意してきます。少し待っていてください」

福原先生が気まずそうに告げて、教室から出て行った。

全くなんて面白い学校だ。

なんて、思っていると吉井と坂本の二人が立ち上がって廊下へ出て行った。

大方、試召戦争のことではないかと俺は考える。代表の坂本は血気盛んそうだしな。それに神童だったらしいし勝つ策でもあるのだろう。それに吉井も何か思うような事がある顔をしていたし。

思わず顔が口角が吊り上ってしまっぜ

「……………悪い顔してる」

「そりゃそうだろう。初日から面白いことになりそうだけ康太」

「……………?」

「恐らくだが、うちの代表サマは初日に戦争の引き金を引くと思っぜ」

Dクラスになど付け加える。そうしていると話していた二人が戻ってくる。坂本の顔は僅かにだが楽しそうな顔してる。

先生が戻り教卓を替えて、HRが再開されて自己紹介の続きが始ま

った。まだ終わってなかったのか。  
特に何も起こらず、また淡々として時間が流れた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」  
「了解」

先生に呼ばれ、坂本はゆつくりと教壇に歩み寄る。  
その姿はまさにクラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように見える。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

その先生からの問いに、鷹揚にうなづく坂本。  
そして、坂本は自信に満ちた表情で教卓に上がり、俺らの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

俺は口パクで「キ・リ・シ・マ」と呟いたが伝わっただろうか。若干、顔が青ざめている様子を見ると伝わったのだろう。嬉しい限りだ。

「転校生、後でお話がある。それは置いて皆に一つ聞きたい」  
坂本はゆつくりと全員の間を見ないように告げる。  
皆の様子を確認した後、坂本の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台。皆の視線も坂



本の視線を追う。

「Aクラスは冷暖房完備な上、座席はリクライニングシートらしいが」

「不満はないか？」

「大ありじゃあっ!!」

これは二年Fクラスの魂の叫びであろう。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ!』

「いくら学費が安いからといって」

とまあ、このように上手くクラスの意識をまとめ上げてるのは流石だな。

この様子じゃ、クラスをまとめ上げるには問題ないだろう。

だが俺が聞きたいのはそんなことじゃない。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

俺は話を聞いてなかったが堰を切ったかのように不満の声が出たのだろう。それぐらいは想像がつく。

坂本は級友たちの反応に満足したのか。自身に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯を見せ、俺は次の言葉を待ちわびる。

「 FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思  
う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた

## 第四問

Aクラスへの宣戦布告。

普通ならそれは現実味の乏しい提案に思えるだろう。現に…

『勝てるわけない』

『これ以上設備が落とされるなんていやだ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

そんな悲鳴が教室内の至る所から聞こえる。それと最後の奴は告白と取られても仕方ないだろう。

しかし、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだろう。

文月学園のテストには点数の上限が無い。

そして、俺たちが戦争を仕掛ける『試召戦争』とはテストの点数が重要になる。

Aクラスはテストの成績優秀者トップ50、比べてFクラスは下から50人。正気の沙汰かと言われるもおかしくはない。

しかし、うちの代表サマは

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

と述べている。

『何をバカなことを』

『出来るわけない』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。だが、

「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

この言葉を受け、クラス内はざわ…ざわ…とざわめく。別にギャンブルをしている訳ではない。俺が思いつく中では5人辺りか。

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上からみなを見下ろす坂本。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!!」(ブンブン)

「は、はわっ」

まずは康太。この親友の情報収集能力は役に立つ。それに俺も出来るし、他のクラスより圧倒的にアドバンテージを得れるだろう。

「土屋康太。こいつがああの有名な、寡黙なる性識者だ」

「……………!!」(ブンブン)

ばらしちゃったか。それが後でミスにならなければいいが。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」

次は姫路。学年次席の実力があって確実にクラスの主戦力になるだろう。

それに男ばかりの中で活躍すれば、クラス内の士気も上がるだろう。

「木下秀吉だっている」

次に木下。彼の特技も戦闘以外で役立つであろう。それに性別『秀吉』なんて噂もあるらしく人気があるそうだ。性別：秀吉とは気にしたら負けだろう。

「当然俺も全力を尽くす」

それに坂本だ。元神童でちゃんと勉強すれば実力はあるのだろう。そして、先ほどまでの演説。大将として相応しいのではないか？

「それに、吉井明久だっている」

そう、最後に吉井だ…って、アレ？ 凄いクラス内が静まり返ってるんだが…

吉井は『観察処分者』というちょっとお茶目な一六歳につけられる愛称を持っているのだが、教師の雑用係を召喚獣を使ってやらされる。召喚獣で雑用をやらされるってことは操作技術は並大抵ではないだろう。

だが、デメリットとして召喚獣が喰らったダメージがフィードバックするらしい。

しかし、どうやら俺の認識はクラス内では違つらしく士気が盛り下がっていた。

それに坂本も特にフォロー無く無視をしていた。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば、全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

どうやら、吉井の事は忘れられたらしく士気は戻っていた。

坂本は満足したのか、吉井と話し始めたが内容はどうやらDクラスへの宣戦布告の使者の話のようだ。

下位勢力の宣戦布告の使者は見せしめに合っただろう。どうやら、いいネタを手に入れられそうだ。

それにしても、吉井を捨て駒のように使う坂本も坂本だが、それを簡単に信じる吉井も吉井だろう。

バカ正直な吉井は、歓声と拍手に送り出され、毅然とした態度でDクラスへと向かっていった。

さて、気付かれないようあとを追いますか。どうやら康太も付いてくるようだ。

「騙されたあつ！」

吉井は命懸けで廊下を走り、Fクラスへと転がり込んできた。

ちなみに、俺は天井にへばりついてる。康太はワイヤーを使ったのが同じような体勢だ。

「いい映像が手に入ったな」

「……………悪い顔」

「この吉井をボコしてる奴らの弱みを握ればそりゃニヤけちゃうだろ？」

「……………たしかに」

「それにボコしては無いが、代表の平賀の弱みも握れたことになる。恐らく指示を出したのは平賀だろう。それに指示を出していなかったとしても、クラス内での暴力を見過ごしてるんだから代表としては問題だろう」

「……………相変わらず悪知恵は働いてる」

褒めるなよ、と返しておく。

気配を消して出たとはいえそろそろ気付かれるだろう。康太とアイコンタクトを交わし教室に戻る。

まあ、戻ったら代表サマに捕まった。想定内である。

「よう康太と服部。今からミーティングを行うから来い。それにあの件のこともあるしな」

後ろを見ると吉井、姫路、木下、島田もいる。主力メンバーか。改めて挨拶するのも悪くない。

ちなみに、あの件とは「キ・リ・シ・マ」の口パクだろう。

「……………コクッ」

「俺も構わない。改めて自己紹介もしたいしね」

分かった。と呟き坂本たちは屋上へ向かい歩きだしたので付いて行った。

向かう途中、姫路の下着の色はみずいろと康太が言っていた。その執念は素晴らしいな。

とりあえず、屋上に着いたので一息ついていたが皆の視線がこちらに向いているのに気付く。

これは何か話せという視線やでっ…！

「では、改めてだけど今年度から転入してきた服部正吾だ。好きなように呼んでくれ。その康太とは親友もとい相棒だ。よろしく」

こんなのでいいだろう。すると各々も紹介し始めていたが、俺と姫路以外は一年の時同じクラスだったから仲が良さが垣間見える。それが終わり質問タイムって奴が始まる。こういうのって転校してきたって気分になるよね！時間も少ないからすぐ終わっちゃったけど！悲しいぜおい！

話は変わるが戦争開始は今日の午後からだそうだ。

吉井の主食は水と塩と砂糖や、姫路が弁当を作ってくるなんて話も出てきたがどうしても地雷な臭いがするぜ。それはともかく、そろそろ話を戻すべきだろう。

「さて、話がかかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

上から坂本、木下、姫路、坂本の順だ。木下の爺言葉のギャップもありなのかもしれんな。



「どんな考えですか？」

「そうだよ雄二！どんな策があるのさ」

「色々と考えはあるんだが…服部、お前なら分かるか？」

と、突然話を振ってくる坂本。恨みでもあるのだろうか、もしくは俺の頭を見てみたいというところか。

「Eクラスは戦う価値もないってところだろ。姫路が万全なら勝てる」と読んでるんじゃないか？」

「その通りだ。振り分け時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、周りを見てみる明久」

「えーっと…」

そう言われ吉井は周りの見渡す。

「美少女三人とバカが二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？雄二が美少女に反応するのも驚いたけど服部君も反応するの!？」

「……………(ポツ)」

「ムツツリ二まで!？どうしよう、僕だけじゃツツコミきれない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリ二に服部」

と、ここで美少女といわれる木下が落ち着かせる。男だけと。

「そ、そうだな。要するに服部の言つとおり姫路が問題ない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「? それならDクラスとは厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えない」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

と、ここで代表サマからの視線を受ける。また説明しろと。

「ダーリン。これはFクラスの初陣だ。ここで、行き成り策も無しにAクラスに突っ込んで無様に負けたら代表サマの信頼が無くなるだろ？今後の試召戦争に影響が出てもいいなら別にいいが」

「そ、そうだね…それに、ダーリンって…」

「自己紹介で言ってたろ？それに経験を積むと共に今後の景気付けも兼ねてるんだろ。打倒Aクラスに必要なピースってのもありそうだが」

「俺の考えてる通りだ。なかなかやるじゃないか」

ふむ、推測通りだったか。やはり元神童と言ったところか。

「あ、あの…」

姫路が大きな声を出したが、何かあるのだろうか？

「吉井君と坂本君は前から試召戦争について、前から話あってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさつき、姫路の為に明久に相談されて

」

「それはそうと…」

明らかに話を遮ったダーリン。これはいい情報だ。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味ないよ」

「負けるわけないさ」

坂本が笑い飛ばす。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

みんなが怪訝そうに坂本を見る。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

その根拠のない言葉には不思議な力がある。

「いいわね。面白そうじゃない」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずりおろしてやるかの」

「……………(グッ)」

「が、頑張りますっ」

皆やる気だな。これが青春って奴か、素晴らしいねほんと。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺たちは坂本の作戦に耳を傾けた。

## 第四問（後書き）

教室へ戻る前

「そついや、聞きそびれてたが…なぜ俺と翔子の関係を知っている？」

「俺も康太と同じようなスキルがあるんだよ。そのぐらい朝飯前」

「…！そつか、お前にも康太と同じような事をするよう頼むかもしれない。それと、このことは内密にしてほしい」

「前者はいいが、後者はどうしようかな」(ニヤッ)

みたいな会話がありましたとき。

やっと、試召戦争に入れます

## 第五問

午後に入り、予定通りFクラス対Dクラスの試召戦争が始まった。今現在、渡り廊下で交戦が始まったのではないか。実際、声が聞こえてくるしね。

かくいう俺は何をしているかというところ…

「テストって暇だなあ・・・」

教室で補給試験を受けていた。

俺って転校してきたじゃん？だから、召喚獣を召喚しようにも点数が無いんだってさ。

隣では姫路も受けてるよ。熱で倒れてテスト受けれてないからね。

「だるうー・・・」

「・・・」

「ふわあー・・・」

ちなみにクラス内には、坂本と坂本の護衛数人に中堅部隊といったところか？そいつらが待機している。

「ふうー・・・」

「・・・」

「はあー・・・」

暇。この一言に尽きる。

「坂本、暇」

あまりにも暇すぎて、ついすっかり話しかけてしまふ俺は悪くないと思う。

「真面目にやれ」

うちの代表サマはそっけなかった。もう少し構ってくれてもいいのではないか？

べ、別にさみしいって訳じゃないんだからねっ。

「いや、やってるからさ。今、現在の状況とか教えてくれてもいいんじゃない？」

「今現在は変わりはないだろう。だが、渡り廊下での戦力はあちらが上だ。少ししたら、増援か策を求めに来るだろう」

俺は、話を聞きながらテスト用紙に答案を書き続ける。そこまで流れを読んでるのね。

「それにしても服部。テストのペースやけに早いが大丈夫なのか？」

「両手でペン持って答案解けば早く終わるだろ。それに全部程々にしてるしな」

「両手で書いて解くって・・・保険としてお前にもちゃんと全部受けてもらいたい教科もあるんだが」

「大丈夫だろ。あの作戦がばれる可能性は少ないと思うが・・・そうだな、一教科ぐらいは全部解くよ」

保険は掛けといて損はないからな。そうと決まれば、やる気を出さねばな。

そんな時に、教室のドアが開く。あれは確か前線部隊に居た須川だ。坂本の予想通りだ。

「坂本！渡り廊下でFクラスが徐々に劣勢になってる。何かいい作戦は無いか？」

これも想定通りか。そういえば先ほど康太からDクラスは採点に船越先生（45歳独身）を呼ぶらしいとの情報を手に入れたそう  
だ。坂本なら、それを逆手に取るのは造作もない。

「須川、これを放送室へ行つて流してほしい。」

そう言つて、坂本はメモを須川に渡す。

「構わないが・・・それで大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。そうすれば、俺たち本隊が合流するまで保つだろう。」

あれを流すのか・・・吉井はダイリンご愁傷様としか言えない。

メモの内容を読んだのか須川はとても軽やかに放送室へ向かつて  
いた。

「さすが代表サマ。なかなか鬼畜なことをするじゃないか」

「褒めても何も出ないぞ？」

いや、褒めてないが。

こいつはすでに末期なのかもしれない。俺も人のことは言えないか。

《ピンポンパンポーン》

これは放送が流れる前の音か。

須川、なかなか行動が早いじゃないか。まさか、こんな早く流れるとは思っていなかったぜ。

《連絡いたします》

《船越先生、船越先生》

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

渡り廊下から吉井の魂の叫びが聞こえた気がする。  
ダーリン

強く生きるよっ…！



## 第五問（後書き）

次回にはDクラス戦を終わらせれたらいいかなーと思ったり

## 第六問（前書き）

Dクラス編終了ですー  
プロフィールちよい変更

## 第六問

やあ、俺だ。あの放送の後だが、俺はいまだにテストを受けている。本来なら、廊下で戦ってる前線部隊を収集する為に出陣する予定だったんだが、坂本曰く、姫路同様に顔を知られてない俺をここでは使いたくないようだ。そりゃそうか。

しばらくすると、廊下からガシャアアン！ブシャヤツ！など聞こえてくる。

恐らく、吉井辺りが時間稼ぎで窓を壊したり消火器を利用したのだろう。作戦としては良いだろうが、後の処理はどうするのだろうか。西村先生の補修が待ちうけてるだろう。

前門の船越、後門の西村と言ったところか。別に上手くはないね。

くだらない事を考えていると部隊を回収した坂本たちが戻ってきた。帰ってきて早々、坂本と吉井が会話をし始めたので俺も混ざることになろう。テスト？終わったかな！

「よう、お疲れダーリン。」

「ありがとう服部君。それと僕が言い始めたことだけど、ダーリンってのは止めてほしいかな」

「はいはいツンデレツンデレ。それより、坂本が何か言いたそうぞ」

これは事実だ。実際、坂本は真面目な顔をしている。

「ツンデレじゃないからね！？で、雄二何か用？」

「明久、よくやった」

俺は驚愕した。まだ、ほんの少し時間しか関わってないが分かる。あの坂本が吉井を称えるなんて……だが、それも一瞬。坂本の顔がわずかに綻ぶ。俺は理解した。あの校内放送のことでいじろうしているのだろう。ならば、先手を打つ！

「放送を指示したのは坂本だぞ。ダーリン」  
「シャアアアアツ！」

吉井は迷いの無い鋭い踏み込みで右手に持っていた包丁を突き出すとしていた。殺意を持った人間ってのは怖いな。だが、坂本はそれを予測していたのか次の一手を繰り出す。

「あ、船越先生」

たった一言。その一言が吉井を掃除用具入れに撤退させるほどの脅威を持っていた。

言葉ってのはどんな凶器より恐ろしいとはよく言ったものだ。坂本は思ったよりいじれなかったのが不満だったらしいが、すぐに切り替え、「Dクラス代表の首を獲りに行くぞ！」なんて言うっており、既に教室を出ようとしている。さすがに放置はかわいそうだから吉井に声をかけとくか。

「ダーリン。船越先生なら居ないぜ。ありゃ、坂本のウソだ」

吉井は恐る恐る掃除用具入れの隙間から教室内の様子を探っている。安全を確認したのか、掃除用具入れの扉を蹴り開け勢いよく飛び出てくる。

「ありがとう、服部君！逃がすか雄二いいいいっ！」

物凄い早さで廊下を駆け抜ける吉井。

後を追うように俺も廊下を駆ける。さて、ここまでの暇だった鬱憤を払いさせてもらいましょかね。

『Dクラス塚本、討ち取つたり！』

やってるやってる。吉井の後を追ってたが、Fクラスの人物と一緒に居たら俺の存在がバレちゃうじゃん？

だから、今は別々という訳なのさ！。

吉井は坂本を殺ろうとしてるが、既に坂本と本隊はDクラス代表とその本隊に囲まれている。

吉井、そんなに悔しそうな顔をするな。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

辺り一帯に坂本の声が響く。

端から見れば、Fクラスは劣勢だろう。

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けは無い！追い詰めて討ち取るんだ！」

Dクラスの個々の実力はFクラスに勝る。つまり、1vs1なら有利な状況を作り出せる。

Dクラス平賀の指示は適切だと思える。故に、本隊も分散し掃討に掛かっている。

だが、それは相手の戦力を知り尽くしている時だ。

今現在は、放課後で下校中の生徒もいる。そして、今日は二年生になって初日である。この学園の規則で、クラス発表は個人毎だ。クラス毎の正確な情報を手に入れるのは難しいだろう。

つまり、姫路と俺というイレギュラーを知られてる可能性は低いということだ。

だから、俺は悠々と下校中を装いながらDクラス代表と近衛部隊の近くへと近づく。

ちなみに、目の前には吉井が近衛部隊に平賀への行く手を阻まれている。

「あの…」

「なんだい？今は、試召戦争の終盤なんだ。迷惑になるからどいて貰えないかな？」

「Fクラス服部正吾、Dクラスの近衛部隊に現代国語で勝負を申し込もうかなと」

『えっ！？』

そりゃ、そんな反応になるだろう。顔を始めて合わす奴が、いきなりFクラスと宣言し大人数相手に戦いを申し込んだのだから。

「驚いてるところ悪いけど…試験召喚」

そう言って、自分の召喚獣を呼び出す。相手の近衛部隊も急いで召喚している。相手は5人。

相手の平均点は120点ぐらいか。代表を守るんだから、クラス内では実力があるのだろう。だが

《Fクラス 服部正吾 現代国語 401点》

『はっ！？』

またまた驚いてるが、戦いはもう始まってんだよね。

近くで棒立ちになってる1人の召喚獣に素早く近づき鎖鎌で首を刈り取ると同時に、未だに棒立ちの他の召喚獣の眉間に棒手裏剣を投擲し見事的中。やはり、人がベースなのか急所は弱いみたいだ。

『戦死者は補習！』

どこからともなく現れた西村先生に連れ去られていく近衛部隊の二人。ご愁傷さまである。

やっと落ち着きを取り戻したのか残りの3人は構えを取る。

「なぜFクラスにこんな点数を持った人物が居るんだ！？」

平賀の疑問は尤もだ。俺は、驚いている平賀に対し答える。

その間にも戦闘は続いているが、相手の剣や槍をかわしちよくちよく反撃する。

「今日から転校してきたんだよ。よろしく」

「よ、よろしく…じゃない！もっと上のクラスに行けたらどう！？」

ノリツッコミをする平賀。だが、そんな暇はあるのだろうか？

指揮官として、代表として次の相手の策に備えるべきだろう。

「まあいいじゃないか。そんなことより後ろ見てみ？」  
「……？」

平賀の後ろには既に姫路が居る。近衛部隊は、俺が相手をしている。つまり、平賀の護衛は居ない。

「あ、あの……」  
「え？あつ、姫路さん。どうしたのAクラスはこの廊下は通らなかつたと思っけど……まさか!？」

そう。そのまさかなんだよ平賀くん。  
俺という存在に気付いた時には、部隊を纏めるなり撤退をすべきだったのさ。

まあ、この動揺を誘うつても坂本の想定通りなのだろう。

「えっと、Fクラスの姫路瑞希です。Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込めます。試験召喚です」

《Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点》

VS

《Dクラス 平賀源二 現代国語 129点》

まっ、こりゃ勝てるだろう。そう思いつつ召喚獣を操作しながら言う。

「姫路、頼んだぞ」

「は、はいっ！」

そう言い姫路は背丈の倍はある剣を振りかざし、平賀の召喚獣を一



撃で葬り去った。

ちなみに、俺は相手の3体の召喚獣を姫路が倒すより早く倒した。  
補習の仲間は増やしてあげた方がいいだろうか？

第六問（後書き）

多少変な所があると思いますがご勘弁を

## 第七問

やあ、また俺なんだすまない。

今は姫路がDクラス代表を討ち取って終戦したところだ。周りはF・Dクラスの叫びが入り混じって耳触りに思うが、まあ仕方ないだろう。

『坂本雄二サマサマだな！』『坂本万歳！』『姫路さん愛してます！』なんて、声が聞こえてくる。

お、俺だって近衛部隊5人相手に立ち回ったんだけどなあー（チラッ　なんて思うけど、皆の頑張りがあったからこそ格上のDクラスに勝利出来たのだろう。）

みなから、褒められて照れている坂本の写真を隠れて撮りながら（ある人物に依頼されてるからな！）、状況が収まるのを待ってたんだが、吉井が先ほどの怨みなのか坂本を殺そうとしていたが返り討ちに遭っていた。やるなら、もっと殺気を隠すべきである。

命のやり取りはいいから、早く話し合いを済ませてもらいたいものだ。すると、丁度いいところに平賀が坂本たちに話しかけようとしていたから混ざることしよう。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて…それにあの転校生の實力も信じられん」

「あ、その、さっきはすみません」

「姫路、謝る必要はないだろ。不意打ち、闇討ちで殺れるならそれに越したことはない」

これは俺の信条だ。わざわざ、正面切って名乗り上げて戦う必要はないだろう。楽にやれるなら、その方法を取るだけだ。

試召戦争で、わざわざクラス名前を名乗るのが厄介だが。

「服部君の言うとおり。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ」

平賀が話を分かる奴で良かったと私は思うのですよ。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

たしかに、今は放課後だ。試召戦争の疲れもあるし、みんなも早く帰りたいだろう。だが、しかし！

「多分、その必要はないぞ。だよな？坂本」

「そうだな。その必要はない」

やはりそうか。隣で吉井が「え？なんで？」って言っている。

「俺たちはDクラスを奪う気はないからだ」

「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「ダーリン。目標はAクラスのはずじゃないのか？」

代わりに俺が答える。

「どうせ敵に回すのならこんな回りくどいことせず一気に攻め込めばいいのに」

「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『バカなお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

どうやら、話が長くなりそうだ。先に平賀と話しておこう。

「FクラスはDクラスの設備には一切手を出すつもりはないだろう」  
「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん条件付きだな。後は任した坂本」

ただで設備を見逃すなんて甘い真似は坂本はしないだろう。条件の内容は、坂本に任すべきだろう。

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したものじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

坂本の言った『アレ』とは、Dクラスの窓の外にあるエアコンの室外機。だが、これはDクラスのものではない。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

間違いなく悪い取引ではないな。だが、一瞬考えこむ平賀。

恐らく頷くだろうが、念には念を押してこの情報を使わせてもらうか。頼んだぞ康太。

「……………Fクラス使用者吉井明久への暴行撮影証拠動画」

「…ッ！」

あの反応は脈アリですな。素直に話を聞いてくれる方は素敵かも！  
って思ったりいー

「…分かった。だが、なぜそんなことを？」

隣で吉井が疑問を持った顔をしている。なぜAクラスが目標なのにBクラスの室外機を？って思っているのだろう。

「次のBクラス戦に必要な作戦なんぞでな」

「…そうか。ではこちらはありがたくその条件を飲ませてもらおう」「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てることを願ってるよ」「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思ってるだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

そっつい、平賀は礼を言っただけで去って行った。

「さて、皆！今日は御苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

と、坂本は締めくくる。その言葉を聞き、皆自分のクラスへと向かい始めた。

坂本が姫路に呼ばれ、それを少し離れたところから見守る吉井。

まあ、関係ないか。俺も帰りの支度をしよう。

現在下校中。帰る方向が一緒だからと、康太と秀吉と一緒に帰宅す

ることにした。

ちなみに、なぜ秀吉と呼んでいるのかと言うと、時折女子扱いされる秀吉を見て、「男で間違いないんだよね？」って聞いたら、「男子扱いしてくれるのはお主と雄二ぐらいなのじゃ！」って、凄く満面な笑みで言われてそこから仲が良くなった訳なんですよ。

「それにしても正吾。Dクラスとの勝負は本当に必要だったのかのう？」

と、秀吉が聞いてくる。康太もコクコク頷いている。

「あくまでも推測だけだな。試召戦争に慣れさせるだとか、他のクラスにプレッシャーを与えたり、格上にも戦えるって事を思わせて士気を上げるとかの狙いがあるだろう。」

「それに、次のBクラス戦で必要な作戦があつたしな」

と、俺は話す。Fクラスの人間が、Dクラスの窓の外の室外機を壊すなんてあまりにも不自然すぎるしな。

「……………なぜ、Dクラスの設備を手に入れなかった？」

次に康太が聞いてくる。秀吉もコクコク頷いている。

「俺たちの目的はAクラスなんだから？Dクラスの設備で満足して、試召戦争を反対してモチベーションを下げられても困るだろ。まったく、坂本はよく頭が回るな」

「……………雄二の考えを推測出来る正吾も同様」

「そっじゃな。ムツツリー二の言う通りじゃ」

間違ってるかもしれないけどな。と苦笑しながら告げる。

つと、そろそろ分かれ道みたいなので、挨拶してそれぞれの帰路へとつくのだった。

やっべわー。夕食の材料買い忘れたわ。ちよーありえねーわ。どうも、また俺なんだ。相変わらず口調が定まらないんだが、許してほしい。こういうキャラなんだ。

上記のとおりそういう状況なので、今商店街にいます。服装は制服のまま。

ちなみに目の前には、文月学園の女子生徒用の制服を着ている秀吉がいるんだぜ。いくら、演劇をやっているからと言って、こんなところまで練習をするなんて熱心である。人目の付くところでやれば、練習に身が入るとかいう理由かね？ だけど見た感じだが、今日よりも可愛らしい気がするんだが？ とりあえず、話しかけようか。

「よう、秀吉。さっきぶりだな。こんな所まで練習か。秀吉も夕飯の材料を買いに来たの？」

「…？」

反応が無い。ただの屍…ではないようだ。そう思い、少し距離を縮める。

「あれ？ 忘れちゃった？ 俺だよ俺」

しかし、よくよく見てみると若干だが眼つきが違つような。それに、



髪留めのピンも違うな。あれ、臭いも違うし骨格も違うような…？  
も、もじゃ…

「人違いでした！ごめんなさいいいいい！」

今、目の前にいる人物は秀吉の姉である木下優子だろう。なんて、失礼なことをしてしまったのだろうか。しかし、よく考えれば分かることであった。

「別にいいわよ。よく間違われるしね。それにしても、よく自分で気付いたわね？」

「よく見ると、眼つきが若干違うし、髪留めのピンも違ったからね」  
こんな俺と普通に話してくれるなんて、ええ人やあ〜。

「それに秀吉とは違う女の子っぽい可愛らしさがあったし」

と、満面の笑みで答える。これで完璧だろう。実際、その通りだし間違ったことは言っていないはずだ。

「かつ、かわいい!?!」

あれ？言葉を間違えたかな？なぜか腕を取られたんだけど？

「秀吉のお姉さん？その関節はそっちには曲がらないけど…」

どうやら、話が聞こえてないようだ。とりあえず関節を戻さないで。このぐらいなら、まだ大丈夫。

「し、ごめんね!?!ちょっと気が動転しちゃって…」

気が動転すると、あれほど綺麗に関節を極めれるのか。

「大丈夫。慣れてるから」

あれ？自分で言ってるって悲しい。初対面の女の子に関節極められるのが慣れてるってカミングアウトしたのだろうか。

それにしても、木下姉は顔が赤い。体調が悪いなら、話に付き合わせるのも悪い。もともと俺が話しかけたのが原因だしな。

「お姉さん？顔が赤いけど大丈夫？話に付き合わせちゃってごめんね。送って行こうか？」

目の前で体調を悪そうにしてたらそりゃ心配だろう。倒れないか心配だ。

「だ、大丈夫よ！？それに一人で帰れるから心配しないで!？」

凄いい剣幕で言われたら、引き下がるしかないだろう。それに何度も言うが初対面だ。

そんな相手に、家まで送らせるのも気が引けるし嫌だろう。それが男ならなおさら。

「そう。じゃあ気をつけてねお姉さん」

「あ、ありがとう。そ、それにアタシのことは優子でいいわ。それじゃ……」

と、言って脱兎のごとく駆けて行った優子（そう読んでもいいらしいので）。後で秀吉に連絡して無事に着いたか確認するか……さて、買い物しなきゃ

## 第七問（後書き）

色々ご都合主義がありますがあまり気にしないでほしいです。なんて言ってみたり

秀吉と優子を無理やり登場させました。

ここまで秀吉との会話が思い出せなかったので見逃してやってください

## 第八問

翌朝、時間ギリギリに登校してきたんだが案の定、吉井は船越先生の件を忘れてるみたいだ。

島田が楽しそうにその件を告げている。割と、どうでもいいことだったな。

今日は、昨日の戦争で減った点数を回復するためにテストを受けるらしい。またテストですか。適当にやりますかね。

「終わったか……」

これはテストの時間が終わったという意味である。テスト出来なかったわあー（笑）という意味じゃないんで勘違いしないでくれよな！ 周りを見渡すと机に突っ伏してるものが多数だ。しかし、そんな中でも元気なものもいるようだ。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

坂本の構造は一体どうなっているのだろうか。気になるが、後にし

よう。

食堂に行くらしいので混ぜてもらおう。弁当持参だが大丈夫だろう。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「俺もいいか？弁当持参だが」

「ああ、島田に服部か。別にかまわないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「さんきゅー」

「……………」（コクコク）

康太が頷いているのは下心だろう。それぐらいは分かる。吉井も俺と似たようなことを考えていたようだ。

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません」

恐ろしい勘である。女の勘（ ）って奴だろうか。分からん。話を換えようとしたのか吉井が話し始める。

「今日は警沢にソルトウォーターあたりを」

「あ、あの。皆さん…」

姫路が話しかけてくる。学食に一緒にいきたいのだろうか？

「うん？姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。お、お昼なんですけど…その、昨日の約束の…」

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

そう言い、身体の後ろに隠していたバッグを出してくる。吉井たち

は喜んでいようだが、俺は思わず震えてしまった。

バッグの中からおぞましいオーラを感じる。話の流れから言つと、あのバッグの中には弁当が入ってるはずだ。

つまり、弁当が危険なんだと。俺の本能がそう訴えかけてくる。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったあゝ」

くっ！？どうする！？このままだと死人がでてもおかしくないぞ！？

「せっかくのご馳走じゃし、こんな教室でなく屋上でも行くかのう」

「そうだね」

だが、俺は弁当を持参している。難を逃れれるだろう。それに俺の勘違いかもしれない。

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

「ん？雄二はどこかに行くの？」

「飲み物でも買って来る。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

坂本、島田は助かる確率が高いな。幸運なやつらだ。

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

姫路弁当の考察をしてる間に、話は進んでいく。どつやら、もう屋上へ行くようだ。

それに付いていき、屋上へ辿り着く。

「天気が良くてなによりじゃ」  
「そうですねー」

秀吉の笑顔が眩しい。これから死地へ赴くからだろうか。  
だが、まだ決まったわけじゃない。中身が上手すぎて、逆に禍々しいオーラが出てしまっているのかな。  
姫路が持ってきたというビニールシートの上へ腰を落とす。

「あの、あんまり自信はないんですけど…」  
『おおっ！』

俺、以外一斉に歓声を上げる。ふむ、見た目はいいな。やはり、思い違いだったのか？  
弁当持参は失敗だったか

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」  
「……………（ヒョイ）」  
「あつ、ずるいぞムツツリーニっ」

素早い動きで海老フライをつまみとり口へ運ぶ康太。だが

バタン  
ガタガタガタガタ

豪快に頭から倒れ、小刻みに震えだした。やはり、毒だったか！？  
早く解毒しなければ！  
俺は素早く解毒剤を康太に飲ませるが、状態は危ない。吉井を秀吉は、お互いに顔を見合わせている。

「……………（ムクリ）」

康太が起き上がる。症状から見てそんなすぐ起き上がれないと思うんだが……

「……………（グッ）」

もういいっ！休めっ！休め康太っ……！恐らく姫路を気遣ったのだから……

「あ、お口にあいましたか？良かったですっ」

康太っ……。お前の遺言は伝わったみたいだぜ……だから、もう心配するな……

隣では秀吉と吉井がアイコタンクトで会話をしているようだ。

どうやら、そろそろ話が終わりそうだ。だが、その時

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

一生贄（坂本）が登場した。

「あっ、雄二」

吉井が止めようとしていたが、それは遅かった。既に卵焼きを口に放り込み、

バク　　バタン　　ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をブチ撒けて倒れた。康太の二の舞である。

「坂本！？ちょっと、どうしたの！？」



島田が声を掛けながら坂本に駆け寄る。

俺は確信した。これは本物であると。

坂本は倒れたまま吉井の方をじっと見て何かを訴えかけていた。

恐らく『毒を盛ったな』と言いたいのだろう。

だが、しかしここまで簡単に人を殺れるなんてどんな材料を使っているのだろうか。

いつの間にかだが、島田が居なくなっている。吉井が対処したのだろうか。

隣では坂本・吉井・秀吉でアイコンタクトをしていたのだが、俺に処理させようという案が出ているらしいので参加することにしよう。

(おい、俺は弁当持参だからパスな)

(!?)

三人が一瞬驚いた顔をする。なぜアイコンタクトを見破られたのか気になるのだろう。

(隣で観察してたからな。それに康太も使えるんだろう? なら俺にも分かる)

(…チツ。ならそうやって処理する?)

舌打ちしやがった。簡単に仲間を売るつもりだったんだな。

「あつ！ 姫路さん。あれはなんだ！」

吉井が叫ぶ。こんな簡単な事に引つかからない…いや、引つかかったな。

その際に吉井が坂本を生贄に弁当を処理する。だが、これはいい判

断だろう。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

坂本も報われない役だったな。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん、特に雄二が『美味しい美味しい』ってすごい勢いで

凄い勢いで流し込んだの間違いだろう。

礼を言う坂本の目が虚ろだ。解毒剤を飲ませてあげよう。

横では吉井が『それじゃ、また作ってきますね』という展開にならないよう奮闘しているみたいだ。

だが、

「あ、そうでした」

嫌な予感がする。

「ん？どうしたの？」

「実はですね」

「ごっそそ靴を探る。」

「デザートがあるんです」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ!？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

解毒剤を飲んだ坂本が命懸けで作戦を止めにかかる。どつやら、三

人で作戦タイムに入ったようだ。

結果、秀吉が頂くようだ。

姫路が立ち上がる。どうやらスプーンを忘れたようだ。

「では、この間に頂いておくとするかの」

秀吉、アンタ男やな…

「……すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

坂本、吉井は俯きがちにそう呟く。そんな彼らに秀吉はフツと笑みを浮かべ言う。

「別に死ぬわけではない。そう気にするでない」

「そ、それもそうだね！」

「ああ！秀吉！頼んだぞ！」

「解毒剤はあるから、安心して行ってこい」

忘れてるかもしれないが、康太は油断出来ない状態だけどな。そんな事言ったら決意が鈍ってしまうだろう。

「うむ。任せておけ。頂きます」

容器を傾け、一気にかきこむ秀吉。

「むぐむぐ。なんじゃ意外と普通じゃとゴばあっ！」

素晴らしい反応を有難う秀吉。早く解毒剤を飲ませなければ。その秀吉の反応を見ていた吉井が坂本に謝っていた。

姫路に毒物は食べれないって言えばこんな犠牲は出なかったと思うんだけどな？

俺が食べる訳じゃなかったから言わないが。

「そういえば、坂本、次の目標だけど」

「ん？次の試召戦争のか？」

「うん」

激しい昼食の時間を終え、皆でお茶を沢山飲んでいた。お茶は殺菌成分が含まれているらしいが、あれに効くかは分からない。

ちなみに、あの被害者三人からは解毒剤をありがとうと感謝された。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

そうだろう。わざわざDクラスの設備を奪わず、室外機の破壊を条件に和平交渉で終わらせたのだから。

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

そういえば、これは一部しか知らないんだっけか。

「正直に言おう」

坂本が神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

まさかの降伏宣言である。だが、無理もない。Aクラス40人はBクラスよりちよつと点数が上ぐらいだが、トップ10は化物らしいからな。

しかし、どうせ策はあるのだろう。わざわざ遠まわしに言うとは面倒くさいやつである。

「それじゃウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはないさ」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

島田のセリフを引き継ぐように吉井が間に入る。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う」

Bクラス戦に勝ち、Dクラス戦と同様和平交渉に持ち込むつもりか。勝たなきゃ意味ないが。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備がどうなるか知ってるな？」

「え？も、もちろん！」

「どうやら知らないようだ。」

姫路が吉井に助け船を出す。負けた場合は設備のランクを落とされる。BならC、CならDという風に。

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

吉井はある意味天才なのではないか？

上位クラスが負けた場合は、負けたクラスの設備と入れ替えられる。

「そのシステムを利用して交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込ませる。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラスの設備で済むからな。うまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどね！」

この状況になれば、Aクラスは2連戦は避けられない。それに体力にも影響が出るだろうしな。

何よりAクラスにとって利益が無い。モチベーションも保てないだろう。

だが、

「それでも問題はあるじやろう。体力としては辛いし面倒じやが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実ではあるのは

たしかじゃからな。それに」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路と正吾がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」

FクラスがDクラスに勝つたとなると、その勝ち方に注目が集まるだろう。

つまり、姫路と俺に対する対策は練られているだろう。俺に関しては現代国語のみが高い転校生って認識されてる可能性もあるが。

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

そう自信満々に語る坂本。足下を掬われなければいいがな。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる。」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったらBクラスに行つて宣戦布告して来い」

これは情報集めのチャンスだな。ぜひ吉井に行つてもらいたい。

坂本と吉井は心理戦アリじゃんけんんで使者を決めるらしいがどうせ、吉井が負けるだろう。

案の定、吉井が負けていた。

こうして、自称365度どこから見ても美少年（笑）の吉井が使者となった。

実質5度だよな。うん。

テスト漬けの午後が終わり、吉井がボコボコにされて教室に戻ってきた。

俺と康太は、天井に張り付いて一部始終を撮影させてもらった。俺がホクホク顔だったのは言うまでもないだろう。そういえば、姫路が妙に拳動不審だったが気にしなくていいだろう。



## 第八問（後書き）

次回から、Bクラス戦ですー  
主人公があまり会話に交じってない件

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5628y/>

---

バカと忍と召喚獣

2011年11月27日05時49分発行